

# IX. 天皇とは何か——死・恋・戦争

## IX-1 天皇論の前提—いかに象徴天皇制論を超えるか？

### ● 坂口安吾の呪縛

天皇制というものは日本歴史を貫く一つの制度ではあったけれども、天皇の尊厳というものは常に利用者の道具にすぎず、真に実在したためしはなかった。／藤原氏や将軍家にとって何がために天皇制が必要であったか。何が故に彼等自身が最高の主権を握らなかったか。それは彼等が自ら主権を握るよりも、天皇制が都合がよかったからで、彼等は自分自身が天下に号令するよりも、天皇に号令させ、自分が先ずまっさきにその号令に服従してみせることによって号令が更によく行きわたることを心得ていた。…／自分自らを神と称し絶対の尊厳を人民に要求することは不可能だ。だが、自分が天皇にぬかずくことによって天皇を神たらしめ、それを人民に押しつけることは可能なのである。そこで彼等は天皇の擁立を自分勝手にやりながら、天皇の前にぬかずき、自分がぬかずくことによって天皇の尊厳を人民に強要し、その尊厳を利用して号令していた。

坂口安吾「続墮落論」1946年12月稿

天皇制研究の流れを最後に図式化してまとめておきましょう。…天皇（制）はなぜ律令制から幕末維新まで生き残ったかといえば、結局、天皇は国家の最終的な意思決定を確定される権威として支配を継続させえたからだとの見方になりますか。本質は不変だということでしょう。権力を持たない権威である天皇が、官位任免体大権を核とする権威によって幕末まで生き延びたというイメージでしょうか。

加藤陽子「天皇はいかに受け継がれたか」『週間読書人』2019年5月24日

- 終戦直後の天皇不親政論（津田左右吉・和辻哲郎）の系譜。学者の天皇論は安吾から一步も進まず。
- 研究者の天皇観は、津田や和辻、安吾を起点とする戦後の象徴天皇制の無意識の反映。

### ● 特異な研究者たち

- ・ 吉本隆明（1924～2012）「共同幻想論」1968、「天皇および天皇制について」1969、「南島論」1970
  - ・ 網野善彦（1928～2004）「無縁・公界・楽」1978、「異形の王権」1986
  - ・ 山口昌男（1931～2013）「道化の民俗学」1975、「天皇制の文化人類学」1989
- みな、終戦を学問形成期に迎える（彼らを天皇制研究に駆り立てる動機）。天皇の力が露呈していた時期。

## IX-2 国家の外部—脱王権

### ● 文献史学の病

文献と歴史叙述の一对一对応を求めるあまり学者は文献から出てこなくなった（俗に「史料のないところに歴史なし」）。

- しかし、われわれの生同様、天皇の歴史は文献を時間的にも空間的にも越える大きさをもって存在する。文献史学には天皇を捉えることはできない。たんに天皇制の内部でその表皮の裏面をみているにすぎない（だから実質（国民）に対する形式（国家）にみえる）。

→ 同じことが《国家》にもいえる。われわれの生が国家に閉じ込められていないのと同様、天皇にもその可能性を認めなければならない。**天皇は天皇制の外にいる。**

● **王権の概念**

王権という学問的な概念は複合的なもの（≠王の権力）。そのため、どれほど王の権力が衰えようと、形式的に（ゼロ記号として）残存する傾向。変革を捉えるのが困難な王権の概念自体が、近年の天皇制論を規定してしまっている。

● **国家の外部（混沌——分析可能な）**

人間は国家をつくる生物。死、孤独、戦いに対する恐怖が、此岸に国家を作り上げる。国家は、死を遠ざけるべく宗教（神）を、孤独を遠ざけるべく家を、戦いを遠ざけるべく警察と軍隊とをこしらえる。

<b>自然</b>	⇔	<b>国家</b>
(勇気にもとづく)	不安	(恐怖にもとづく)
<b>死生</b>	⇔	<b>宗教・道徳（善悪）</b>
<b>孤独・恋愛</b>	⇔	<b>家・結婚（公私）</b>
<b>戦士・戦争</b>	⇔	<b>兵士・警察（正義・犯罪）</b>

● **大嘗祭——農耕儀礼か？**

- ・ 前天皇から「天皇霊」を受け継ぐ儀式。折口信夫は「大嘗祭の本義」において、これを天孫降臨の再演と指摘。
- ・ 研究史的には典型的な農耕儀礼と定義され、天皇霊＝穀霊（豊穰霊）とされることが多い。
- ・ ただし、「天皇霊」は文献上（敏達紀）、戦争との関連で出てくるもの。

【神祭次第（4日間）】

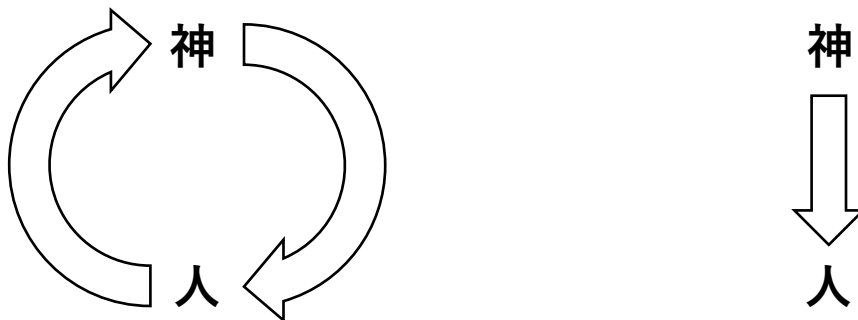
11月卯日 悠紀殿儀・主基殿儀 ①天の羽衣着脱（潔斎） ②薦享の儀（神饌親供） ③真床覆衾での就寝（聖婚？）

辰日 辰日節会 悠紀帳中心の直会（神人共食） / 巳日 巳日節会 主基帳中心の直会（神人共食）

午日 豊明節会 ①国栖舞 ②久米舞 ③吉志舞 ④悠紀主基両国の風俗歌舞 ⑤五節舞

- 悠紀国・主基国はかならず畿外に（前者は東、後者は西）設定される。大和朝廷勢力範囲の東端・西端を形成。
- 天皇霊は外部（外来魂）との接触・吸収により活性化、再生（新陳代謝）する。
- 国栖舞は神武東征に服した吉野の豪族が応神行幸の際に舞ったもの。また、久米舞・吉志舞ともに戦闘歌舞。
- 天孫降臨が示唆するのは戦争。ニニギはアマテラス・高御産巢日によって戦場となっていた葦原中津国に送り込まれた（贖罪山羊として？）赤子。葦原中津国からみれば、先触れなしに登場した**私生児 natural son**。

● **呪術・宗教**



## 呪術的円環

## 宗教的線分

- 「呪術的円環」：社会は災厄と生成とをもたらす神の力にたえず晒されている。タブーは呪術者の科学。神が人に入り込むことも、人が神になることもある。交渉可能な神。時間は円環。**戦争は、この円環をもたらす重要な契機。**
- 「宗教的線分」：神人の距離に比例し一方は偉大に、他方は従属。結果として生じる神の遠ざけは社会を安定化。神の虚構化・道德化・合理化が進む。蓄積的・年代記的時間概念が可能に。宿業（仏教）や血脈（儒教）を意味できる。
- 「呪術的円環」は天武朝以前を、「宗教的線分」は天武朝以後・律令にもとづく支配を表現していると考えてよい。

### IX-3 流浪の戴冠詩人—中世の天皇

#### ● 宮廷（女房）文学の時代

直系相統を志向した天武朝は淳仁天皇（3世）で途絶え、平安時代に突入。血の問題はいかに解決されたのだろうか？

- 無名の女房たちのもつ絶大な力の意味（女房奉書・宣旨・源氏物語・後鳥羽院）。それは神（<sup>しよじょう</sup>主上）の言葉を下々（<sup>しよじょう</sup>衆生）に一筋に伝える巫女の力を淵源とする。
- 近世には歌を朝廷衰微の原因とし、源氏物語を淫乱の書と決めつけた後光明天皇のような存在があったが、近世は皇位継承が不安定な時代（女帝の立った時代）。
- 文献史学は結局のところ皇統譜を信用することしかできない。歴史家は閨房を空想することが許されているか否か。Cf. 『日本霊異記』における雄略天皇と少子部<sup>ちいきこべのすがる</sup>蝶蠃の記事。
- 少なくともいえることは、平安期の宮廷は恋愛＝自然から、歌の形で絶大な力を得ていたということ。

#### ● 院政から武士の時代へ～安徳以後

天皇生前に代送りの大嘗祭をおこなう院政は何を意味するのか？ ともあれ、天承2年（1132）、鳥羽院は平忠盛を殿上に招いた。恋愛のみならず、戦争をも取り込んだ宮廷は、もはや国家というより自然と呼ぶべきだったかもしれない。安徳の死は、王権のあり方を大きく変えた。善悪の彼岸で、この少年王は自然の力＝剣を抱いたまま海に眠る……。

自然	⇔	国家
(勇気にもとづく)		(恐怖にもとづく)
死生（院政）	玉	王法・仏法（御成敗式目）
孤独・恋愛（女房）	鏡	家・結婚（北条得宗）
戦士・戦争（武士）	剣	兵士・警察（武家権門）

- 平安期にいたり、徐々に《自然》を内裏に引き入れ、天皇の周囲から国家形式が消失する傾向。
- 後鳥羽院以後、主権の主体としての天皇は姿を消す。
- 王権の構成要素としての天皇はわずかにその外郭に触れるにすぎない（官位任免体）。ただし、天皇は叙位任官の権威のゆえに存続した、という見方は世俗の権力者の、あるいは王権研究者の見方。
- 中世における自然と国家の距離の増大、国家合理化の拡大は、自然と国家とを対立的なものに変える。  
《北条氏・徳川家による統治の本質は自然の抑圧にある。》
- 天皇は自然の側にあって、その力を背景に、世俗権力に対して反覆を窺う勢力として潜勢化・内在化。  
《中・近世天皇の本質は反＝国家性にある。》

● 革命の旗手／文学（自然の力をおのれのものにすること）

- ・ （天智天皇—乙巳の変／天武天皇—壬申の乱）
- ・ 後鳥羽院—承久の乱……………宝剣喪失 →①
- ・ 後醍醐天皇—正中の変……………「天皇御謀叛」 →②
- ・ 明治天皇—戊辰戦争……………統帥権奪還 →③

→ 天皇は青天の霹靂のように登場し豪族と抗争を繰り広げ、勝敗に関わらずたちまち権力を失う。  
 → 歌の問題。革命に先行する《歌》……天地を動かし鬼神を感ぜしめる「自然之理」（『新古今』）。

① 『新古今和歌集』「高き賤しき、人を嫌はず」選んだ勅撰集。「夏は妻恋する神なびの時鳥……」

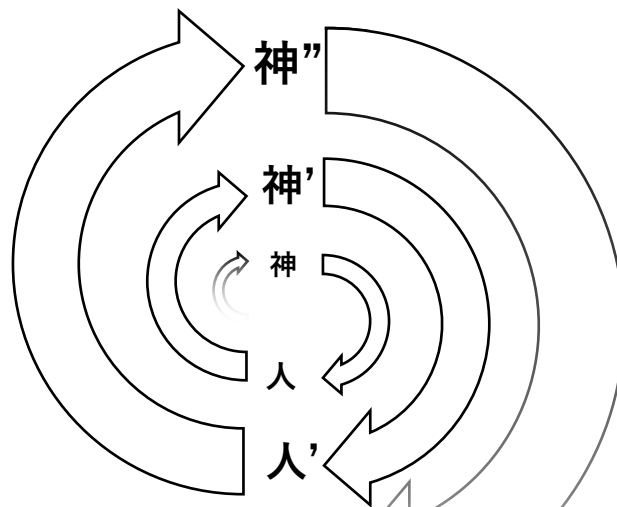
やまと哥は、むかし天地ひらけはじめて、人のわざいまださだまらざりし時、葦原中つ国の言の葉として、稲田姫、素鷲の里よりぞ伝はれりける。しかありしよりこのかた、その道さかりにおこり、そのながれ今に絶ゆることなくして、色にふけり心をのぶるなかだちとし、世を治め民を和らぐる道とせり。

② 京極為兼『為兼卿和歌抄』

言葉にて心を詠まむとすると、心のままに言葉の匂ひゆくとは、かはれるところあるにこそ。

③ 本居宣長『玉勝間』

そも / \ 道は、もと学問をして知ることにはあらず、生れながらの真心マコロコなるぞ、道には有ける、真心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ、然るに後の世の人は、おしなべてかの漢意にのみうつりて、真心をばうしなひはてたれば、今は学問せざれば、道をえしらざるにこそあれ、



- ここでいう「心」は、共同性と対置される形であられる孤独が見出す「自然」を意味する。
- 「歌」とは、自然＝民の力を言葉として受け取ること。「歌」は、神が歌人の口を借りて語る変革の指令。
- 海に沈んだ安徳以来、天皇はその本質を国家の外部に置く。政治的には、王権の回復を求めつつ（王政復古）、その不可能に直面する悲劇の物語の素材となる。
- 革命とは、復古を求めつつ、その不可能をむしろ新たな事態として肯定すること。再現（円環）から更新（螺旋）へ。

④ （番外）大逆事件……幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」

即ち私共が革命といふのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くば党派が、丁の個人若くば党派に代つて、政権を握るといふのではなく、旧来の制度組織が朽廃衰弊の極、崩壊し去つて、新たな社会組織が起り来るの作用をいふので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に

厳正な意味に於ては、**革命は自然に起り来る者**で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

Cf. 田山花袋「近代の小説」

明治四十年から四十二年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。…後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道德な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの芽であつた幸徳秋水等の社会運動とつゞいて行つてあるやうにさへ思はれた。

## IX-5 結論

自然の循環を運命として受け容れざるをえない、脆弱な王権を構成する諸主体の中心的存在だった上代の天皇は、必然的に、自然の猛威に身をさらす危険を冒さねばならず、その意味で逆説的に王権の外部にも、自然史的かつ神的な足場を持っていた。それが死・恋・戦争である（それを一身に体现するスサノオ）。天皇は自然に対する交渉役にして防波堤であり、死・恋・戦争によって国家の代謝を促す時の支配者でもあった。血の繁栄は、高天原から葦原中津国に流された私生児 Natural Son の一族としてのものであり、問題は血よりも自然との交渉役としての聖性を独占することにあつた。

最初の転機は天武・持統朝にある。この王朝を契機として、王権は次第に大陸的な、折り目正しき人間身体を備えるようになった。神々との対話のため、十重二十重にタブーに絡みつかれていた天皇の力は、自然と国家とのあいだの距離の相対的な拡大によって、たしかに、政治的には、王権を構成する一要素として、たんに形式化していく傾向をもつた。

しかし、それはあくまで形式上の話である。実態は異なるようだ。国家形式の影で宮廷に密輸入されていた、世界的にも特異な女房たちの文学は、国家の内部に恋愛の力を引き入れていたし、よく知られている通り、のちには武士をさえ殿上に招き入れるようになった。天皇の周囲で、彼を中心に生じたこの異様な事態はなにを意味しているのだろうか。

中世、とりわけ安徳帝から後鳥羽院を経て、天皇は王権においては形式以外の力を喪失する。そのことはかえって、潜在的には天皇の本質を強調する結果を招いた。すなわち、国家の外部にあって、死や恋、戦争という自然＝神々の力をたえず備給しながら、共同体に亀裂を走らせて消え去る稲妻である。この一族は、世俗権力に対する反国家的な一族として、青天の霹靂のごとき鉄槌を下す機会をたえずうかがっていたようにみえるのである。

後鳥羽院以来、敗者の系譜は昭和天皇にまで連なる。たとえ明治天皇が天智・天武以来の革命に成功したとしても、しょせんは革命の一族であつて、世俗の統治においてはたちまち権力を失っていくのはいつの世も同じである。大東亜戦争は自国も含めた“近代国家”なるものに対する叛乱であり、日本の自然が抱いた八紘一宇の夢は、やはり夢のまま終わる。

天皇はなぜ存続したかという問いは、王権の主体として天皇が考えられているかぎり、その本質から離れたものだ。天皇の本質は持続よりも切断にある。日本の歴史は、むしろ天皇を王権から排除していく歴史であり、王権が衰弱したときにこそ、天皇はその真の姿をあらわす——破壊と再生の使者として。